

学説史研究の方法—— 社会学的方法の導入について——

大 道 安 次 郎

一

この小論を私ごとから始めることをお許し願いたい。私は関西学院がまだ神戸の原田の森にあった頃の高等商業学部で新明正道先生から社会学の手ほどきを受けたあと、九州帝国大学法文学部で高田保馬先生のもとでジンメル、テンニエス、デュルケムなどの社会学を教えられて、卒業後直ちに母校に奉職したのは、昭和5年のことであった。当時すでに関西学院は現在の西宮市上ヶ原に移っていた。社会学を専攻したので（もちろん社会学の入口をうろうろしていた程度に過ぎなかったが）、当然社会学を講ずべき筈であったのが、文学部にはすでに小松堅太郎先生という立派な社会学者がいたので、私は「経済学史」を講議することになった^{1), 2)}。

「経済学史」は経済学の起源、代表的な学派、さらに別な学派の関連などを、専ら学者の学説を中心として、その変遷の跡を歴史的に辿ることが課題であるとされていた。だが私は切角社会学を勉強してきたので、社会学の方法を学説史研究に導入しようと考えた。経済学の起源にしても、学派の代表的な学者の学説にしても、その学者の学説を「原本」を繙いて理解することは当然であるが、単に学説のみの研究に終始するのではなくて、その学者の学説がいかなる社会的背景と結びつき、いかなる意図のもとに形成されたかを探ること、端的にいえば社会との関連において、学説や

学派の形成を見直すことが必要ではないかと考えたのであった。とはいっても何分いまから50年ぐらい以前のことであるから、このような角度からの学説研究の明解なモデルがなかった。たとえ潜在的な形で存在したとしても、当時の私は極めて幼稚であったので、それを見抜くだけの能力に欠けていたのかも知れない。モデルがなかったのでいきおい手さぐりで何とかしなければならなかった。そうした苦渋の模索のときがかなり続いた。ところが凶らずも偶然にあることがらからヒントを得ることができた。

当時の私は独身であったので、毎年の夏休みの大半はどこかで過していた。確か昭和10年頃であったか、高野山の弘法大師とゆかりの深い龍光院の離れの小さな一室で過したことがあった。午前中は読書や原稿を書くのに費したが、午後は殆んど日課のように霊宝館を訪れたり、寺々の宝物を拝観したり、ときには伝手を求めて秘物の赤不動明王像や青不動明王像に額づくこともできた。霊宝館には密教芸術の粋をこらした国宝や重文クラスの作品が一杯陳列されていたが、そのなかに二種類の菩薩来迎の図があった。一つは平安時代の恵信僧都の筆になると伝えられている二十五菩薩来迎の図であり、ほかの一つは鎌倉時代に制作された菩薩来迎の図であった。前者は慈悲を温顔一面にただよわせた大日如来の巨大な像を中央に、多くの菩薩がいろいろな楽器をいかにも楽しげに奏している姿を、琵琶湖と覚しき湖面を背景に描き出されたものであるが、そこに見られるのは極

- 1) この間の事情の一端は関西学院通信「クレセント」vol. 9 No. 1, 1985 Summer, 第18号所載「インタビュー、生き、学び、そして教える探究者の声、大道安次郎」の稿101～106頁参照されたい。
- 2) 私が「経済学史」の教師として出発したことは、その後の私の研究に決定的な影響を与えている。私はそこには「運命的なもの」があったと思っている。そういえば、私が新明先生や高田先生に社会学を学んだことも「運命的なもの」である。と同時に学者が何を研究するかも、外在的要因によって決定されていることが多いし、そこにもまた「運命的なもの」があると思っている。

楽の世界とはこのような楽しい世界であるかを示していると同時に、極楽の世界にゆっくり迎え入れようとする菩薩たちのポーズであった。そういえば湖面にはさざ波ひとつ立っていないし、また菩薩たちの乗っている雲も静かに棚引いていた。ところが鎌倉時代の来迎の図になると、ひとりの菩薩が逆まく雲の上から体を前方に乗出しながら手を差しよべている構図であった。私はそこを訪れるたびにこの二つの画面の前に傍んで一刻を過ぎた。私は仏教徒でもないし、また絵心もない。だからこの二つの絵についてのよしあしをとやかくいう資格はない。ただ同じテーマで描かれたものであっても、どうしてこうも構図が違っているのであろうかという疑問がいつとはなしに念頭に浮んできた。そして私なりに考えたことは、その相違は平安時代と鎌倉時代の当時の社会状況を反映したものでなかろうかということであった。平安時代は平和な時代であったから、その当時の人びとの多くは極楽往生をそう急がないが、動乱に明け暮れていた鎌倉時代では、その苦しい世界を逃れて一刻も早く極楽往生したいと当時の人びとの多くは望んでいたのであろう。平和な時代に住む人びとの安心立命の気持と動乱の時代に住む人びとの切迫した気持を、仏画師たちが直観的にとらえて、仏の慈悲をそれぞれの画面に反映させたのではなかろうかと思ったのである。

当時の私は経済学史を社会学的立場から見直すための方法を模索していたので、たとえ芸術の世界と科学の世界とは異ってはいるとしても、それぞれの時代の社会状況の在り方によって構図の表現の仕方が異っていることを念頭に入れて、経済学史の研究手法に生かすことができるのではない

かと思ったのであった。

私はすでに「存在が意識を決定する(マルクス)」という命題やK. マンハイムの存在結合性の理論については、観念論的にはいくらか承知していたが、さきの二つの仏画を前にして、存在(社会的状況)が意識を決定している事実を如実に肌にかけて実感したのであった。そして社会状況の変化によって、こつこの仏画の構図の表現が異っているように、学説や学派の異っているのと同じではないかと思ったのであった。

そこでこれまで学説として理解していたマルクスやマンハイムなどの理論を、単なる学説としてではなく、私の経済学史の方法に積極的に生かすために、改めて彼らの書物に目を通した。そして「存在が意識を決定する」というマルクスの命題やマンハイムの存在結合性の理論を生かそうとした。両者の理論に共通している点は、学説(意識・イデオロギー)が存在(社会状況)によって決定されるという点では一致しているが、理論構成の立場や意図が異っているので、当然細部にわたっては異っている。だが私は彼らの学説そのものを研究対象にしているのではなく、彼らの理論を私の経済学史の方法に導入しようと考えていたので、存在(社会)と意識(学説)との結びつきの点にのみ着目して生かせばよいわけである。このように考えて私なりに彼らの理論を再構成すればよいのである。だからとくに唯物史観にこだわったり、知識社会学にこだわる必要はない。学説が「存在」と深く結びついているという点のみを私の経済学史の方法に生かせばよいわけである³⁾。

3) マルクスが(1818~1883)が祖国のドイツで「存在」としてとらえていた当時の国民社会ではフランスやイギリスと同じように資本主義体制が確立しはじめており、王侯、貴族、資本家たちを中心とした少数の人びとが支配階級を構成しており、大多数の無産の勤労者たちは被支配階級の構成員であった。すでにヨーロッパの先進国では、生産力視点からは狩→牧→農→工→商の段階に達していたので、国民総生産は古代、中世とは比較にならないほど増大していたが、王侯、貴族、資本家たちが生産手段と政治権力を握っていたので、増大した富の殆んどは彼らの手中に収められており、大多数の無産の勤労者たちは、「豊富のなかの貧困者」として自らの手でその日の食を稼がねばならなかった。マルクスは当時の「存在」であった国民社会の在り方がこのような有産階級と無産階級に分れていることにいち早く着目した。いわゆるブルジョワ階級とプロレタリア階級であり、前者は支配階級であり、後者は被支配階級である。だが彼はこれら二つの階級の関係を協調関係としてとらえずに、抗争と対立の関係として、階級闘争の関係としてとらえ、やがて後者の勝利に帰することを予見し、確信した。彼が「共産党宣言」(1848)を執筆したり、晩年亡命先のロンドンで「資本論」(全3巻、I巻は生存中、II、III巻は没後出版)、「剰剰価値学説史」(全4巻、全部彼の没後出版)などの大著をものしていた。だが彼の予見が正しかったかどうかについては、彼の没後の事実が実証しているし、また多くの専門家たちが詳論しているので、

二

さて存在結合性の理論が社会学的方法のひとつの有力な方法と考えて、この方法を学説史研究に導入することが、ここでの課題となるわけである。そしてその課題の遂行をひとまず、スミスの「国富論」の生成を辿ることから始めよう。

いうまでもなく「国富論」はスミスの天才によって著作となって出現したのであるが、それは彼の天才が当時の「存在」（社会的状況）のなかに誰も気づかなかった「経済の成熟」の本質的なものを体系化して、「国富論」という書物にまとめあげたからである。その本質的なものは誰でも認めざるをえないものであったからこそ、彼が「経済学の始祖」といわれている所以である。

だが彼の人並みはずれた分析力、総合力、また直観力にしても、素質としては存在したであろうが、それらが「国富論」という書物にまとめあげるには、人並み優れた彼自身の努力に加えて、彼をとりまいていた「存在」によって育成されたことも見逃してはならない。

ところで彼の時代はすでに経済を無視しては社会生活を営むことができないまでに成熟していた。マルデヴィルの「蜂の寓話」（1714）が「私悪・公益」と題して、個人の経済的行為を遠慮深く表現していたのが、スミスの時代にはその経済的行為が名実ともに是認せざるをえないまでに「経済の成熟」が見られていた。また中世的な宗教の権威は世俗の「人間の自由」の前に衰退せ

ざるを得なかった。だがこうした「経済の成熟」はスミスの時代にはイギリスやフランスなど西欧の先進諸国のみに見られたのであって、東洋、アメリカなどの諸国ではまだ見られなかった。今日隆盛を誇っている北米合衆国すらも当時は後進国であった。だからすべての国ぐにが等しく「経済の成熟」の域にあったのではない。たまたまスミスが生れたのはイギリスのスコットランドであったから、彼が「成熟した経済」を客観的総合的にまとめあげることができて、それが「国富論」の著書となり、「経済学の始祖」となったのである。だから彼にとつての「存在」はすでに「経済の成熟」の域に達していたからだといえる。だがすべての彼と同年輩のスコットランド人が、彼と同じように「経済の成熟」を客観的に経済学の対象としてとりあげてはいなかった。というのはそこには各人各様の生活環境があり、また各人各様の素質がその生活環境によって左右されていたからである。たまたまスミスの素質が彼の「存在」によって生かされたからである。これらのことがらを念頭において、以下いくつかの段階に分けて少し立ち入って考慮してみよう。

まずはじめに触れておきたいことは、スミスは生れながらにして人並み優れた分析力、総合力、それに直観力に恵まれていたであろうが、それはあくまでも素質であって、彼が成人期に達するまでの彼自身の並みはずれた努力のほかに、彼を取りまいていた「存在」、換言すれば周辺的情況が極めて恵まれていたので、その素質を現実化したからである。いわば彼の幼・少・青年期の環境が

ここでは立入らずに、彼のとらえた当時の存在（社会的、経済的状況）が対立する二つの階級に分かれていたことだけを確認しておくだけでとどめよう。またマンハイム（1893～1947）のとらえた当時の「存在」は、マルクス時代より少し遅れていたからそれだけ二つの階級の区別と対立は明確化していた。

ところがマルクスは「意識」（イデオロギー、科学・文化などの形成と形態など）が「存在」の在り方によって基本的に決定されていると説き、「意識」によって「存在」の在り方が基本的に決定されるのではなくて、逆に「意識」が「存在」の在り方によって基本的に決定されることを明確に打出している。ところでマンハイムもマルクスと同一線上を歩んでいる。だが、マンハイムの「イデオロギーとウトピー」はマルクスの没後の1929年に出版されており、マルクスの所説を批判的摂取のうえでの著作である。だからイデオロギーのとらえ方にしても両者の間に差異が認められるのは当然である。彼がマルクス主義を特殊的部分的イデオロギーとしてとらえ、全体の一般的イデオロギーを説く自分の立場と區別して、「社会的に自由に浮動するインテリゲンチヤ

（Sozialfreischwebende Intelligenz）こそが、その役割の担い手だと説いている。だからマンハイムの知識社会学は「唯物史観の歪曲」であり、マルクス主義のイデオロギー論に水をさし、それを骨抜きにしようとする意図があったといわれたりしている。だが、それはともかくとして、彼の「存在結合性」（Seinsgebundenheit）、あるいは「存在被規定性」（Seinsbestimmtheit）は、大筋においてマルクスと同一線上にあることを確認したうえで、それらを学説史研究に生かせばよいのであって、両者の差異を云々したりすることは、マルクス主義や知識社会学研究の専門家たちに任そう。

その素質の育成に役立っていたからである。成人になるまでの彼はほかく多くの同時代の幼・少・青年期のスコットランド人と異って、その「存在」は極めて恵まれていたからこそ、成人期に達してその素質が現実化したのであった。しかも当時の彼の「存在」の幅は極めて狭く、家庭や学校の範囲を出ていなかったのも、その「存在」の背後に「経済の成熟」があったことなどを学問的対象として取り組むまでの眼を持ってはいなかった。いわば当時の彼の幼・少・青年期はこの眼を育成すまでの育成期あるいは学習期であった。当時の彼は全く受け身の立場であって、育成される立場にあったといえる。だから同じ「存在」とのかかわりといっても、成人後のそれとは区別する必要がある。成人後の彼はこれまでの素質を充分生かせる形で身につけた学者として、「存在」とのかかわりを持つことができた。その際の「存在」は「経済の成熟期」を迎えつつあったスコットランドであり、イングランドであった。彼の視野は育成期の狭かったとは格段と広がり、さらに誰も気づかなかった「存在」の本質的なものまでをとらえ、それを体系化して「国富論」にまとめるまでに成長していたのであった。このように見てくると、彼をめぐる「存在」は二つに大別して、育成期のそれと成人期のそれとに分けることができよう。しかもそれぞれの時期をさらに細分して考察することも必要である。

なおこれらのことがらについては、これまでに J. Rae, *Life of Adam Smith*, London, 1895. (大内兵衛・大内節子訳「アダム・スミス伝」, 1972) や E. R. Pike, *Adam Smith, Founder of the science of economics*, London, 1965. (中村恒矩・竹村孝雄訳「アダム・スミス——経済学の創始者——」(1971.) その他のスミス伝、さらにマルクス主義の立場から書かれた、最初の、もっとも包括的なスミス伝といわれているソ連人 A. B. アニーキン博士の「アダム・スミスの生涯」(モスクワ, 1974) (邦訳は松川七郎監修者、訳者小松山愛子、勁草書房、昭和50年刊)などに触れられている。ここでは特にレーとアニーキンの両書を参考にしながら、私の立場から再編成したことを申し添えておきたい。

そこで以下の考察をつぎのような順序で進めることにしたい。まず彼をめぐる「存在」を彼の素質の育成を養育期と学習期に分け、前者は幼少年

期であり、後者は青年期における彼をめぐる「存在」として取りあげ、つぎの「存在」は、大人に成長した彼が「国富論」の完成へと歩む段階であって、それを更に細分して考察するにしたい。

そこでまず彼の学者としては類まれた素質や天分が幼少年期と青年期において実を結んでゆく経過を、彼をとりまいていた「存在」との関連において見てみよう。

大別した I の部分がこの時期に当たるが、それをさらに A. 幼少年期の養育期と B. 青年期の学習期に細分して考察を進めたい。

I—Aの段階—幼少年期

この段階は専ら彼の天分や素質が彼をめぐる「存在」、いわば彼の家庭や学校教育によって培養される時期である。彼は1723年1月末に、スコットランドの沿海のカーコーディという小都市、当時の人口はせいぜい1,500から2,000人ぐらいの文字通りの小都市の港まちに生れた。カーコーディのまちは、フォース湾の北岸、エディンバラの向い側にあった。彼の父は税関主席監督官、母はマーガレット・ダグラスという後妻の間に産れた。もともとスミス家はアバディーン郊外のそう裕富ではない土地所有者であったが、それでも彼の父をエディンバラ大学に学ばすぐらいの余裕があった。そして彼の父は20歳をすこし越えたときに、スコットランドの国務相で、著名なホイッグ党員で、対イングランド接近論者であったラウドン伯爵の秘書官となり、1714年にカーコーディ地区の税関主席監督官となり、妻子とともに移住した。3年後に妻を亡くしたのでマーガレット・ダグラス(スミスの生母)を後妻に迎えて、2年あまりダグラスとともに暮したが、1723年1月末に急死した。そのときダグラスの胎内にはすでに経済学者スミスを宿していた。当時の父は40才ばかりの働き盛りであり、年収は300ポンドという当時のカーコーディでは異例な巨額であった。だからかなりな資産家であった。先妻の子供の生活を保証したり、マーガレットの生活にも充分な資産を残すことができたのである。父を失ったスミスは末亡人となったマーガレットとともに、この地で1738年グラスゴウ大学に進学するまでの幼少年期を過した。その幼少年期について特筆すべきいくつかがこのことがらについて触れておく必要があ

る。

その一。何よりもまず挙げねばならないことは、彼の幼少年期は慈愛あふれる母親とともに過したことであった。彼は生来虚弱で、病気がちな子供で、ときにはベッドでなん週間もすずすこともあった。母の慈愛のこもった庇護がなかったならば、恐らく若死していたであろう。さらに彼女は彼に無駄使いをせず、質素と節約を旨とすることを身をもって教えていた。スコットランドはイングランドと比べて経済的には後れていたのだから、一般的には貧困であったから、儉約はスコットランド人の民族的特徴であったが、彼女はストラセンドリ出身のかなりな大地主の娘であったし、また亡夫の遺産もかなり残されていたので、少しぐらいの贅沢や無駄使いぐらはできたであろうが、それを敢えてしなかった。といて彼女は必要なときには出費を惜まなかった。こんなエピソードが伝えられている。亡夫の葬儀に際して金を惜しまぬように葬儀委員長（亡夫の親友ジェームズ・オズワルド）に頼んだということ、さらにまた子供のスマスが読書好きであったので、そのための出費を惜しまなかったことなど。

その二。ところでさきにも触れたように彼の誕生以前に父がこの世を去っていたので、幼少時は母ひとり、子ひとりのいわゆる「欠損家族」のなかで送った。このような場合には母が子供を過保護にすることが多いので、子供はわがままに育つことが多い。あるいは「欠損家族」の子供であるために、ものごとを僻んで見たり、人間関係がうまくいかなかったりすることが多い。だからアンバランスな癖のある子供として育つのが普通であるのに、彼の母はスマスを育てるのにそうした過保護的な態度をとっていなかったようである。子供には慈愛の態度で接してはいたが、それを表には出さなかったようである。万事はひかえ目であった。これは彼女の天性であったのであろう。スマスの天性にもそうした面があったが、それが同じような天性の母と幼少年期を過したのであるから、その天性がそのまま身についたのであろう。そればかりでなく、彼には人なつかしさ、人好きのする天性もあった。そしてそれは何人に対しても偏見を持って接しない態度、相手に埋没しない態度、公平な態度で接することと通じている。こ

れが後年「公平な傍観者」(impartial spectator) という人間関係を望ましい態度として推奨としたことにも現われたのであろう。

彼は後年多くの有名なクラブに属していた。それは決して功利的意味からではなく、天性から好んでいたからである。また当時一流の知識人、文化人、実業家とも交友関係にあった。クラブのメンバーにしても、一流人にしても、いずれも一癖も二癖もある人たちばかりである。ときには蟲の好かない人びとや肌の合わない人びともいたであろうが、これらの人びととも「公平」に接していた。これは功利的な明哲保身のためではなく、彼の素質として持っていた人なつかしさ、人好きのする人柄が、さきに触れた性格の母とともに幼少年期を過すうちに、自ら身についたからであろう。

その三。さきにも触れたように、彼は生来虚弱であったので、何ごとにも行動的でなく、万事ひかえ目の少年であった。いわゆる餓鬼大将とか腕白小僧とかいわれる類いではなく、その代りに読書欲が旺盛で、彼の読んだ書物について耳を傾ける二、三人の幼い友人が彼の周囲につねにいた。またその頃後年彼に見られた放心癖や独語癖がすで見られたようである。

その四。だが彼の少年期にはほかの多くの人びとに見られない特異な傾向があった。それは観察したり、いろいろわたくしづねる癖であった。近くの港の船の貨物の陸揚げや積みこみを注意して観察したり、船乗りたちと話をしたりして、多くのことがらを知ることができた。さらに父親と近しかったオズワルドの敷地に釘を製造する家内工業の工場があった。そこでは主人自身と10人ばかりの徒弟が終日釘を鍛えあげていた。設備は鍛冶の炉、金敷、ハンマー、やっこ、それに鋏だけであった。子供のスマスはその工場にとき折訪れて、各人が自分に割り当てられた仕事をじょうずに処理していくのを見ていた。ある職人は針金を切断したり、別な職人はそれを赤く熱し、第三の職人はそれをハンマーで打ち、第四の者は釘の頭部を圧延するという分業による「流れ作業」によって釘が生産されている状況であった。さらに職人たちが休息のために腰をおろすと、少年スマスは根掘り、葉掘り質問した。たとえば日に何本の釘をつくっているのか、どこから釘金や石炭

を運んでくるのか、どんな釘に最も多く必要があるのかなど。この少年時代のスミスの釘工場での観察が、後年の「国富論」に展開された分業論にヒントを与えている。もちろん幼い彼としては「流れ作業」による生産過程が、1人で全部の作業をするよりも、生産量が多くなり、収入もそれだけ多くなるとか、さらに職人が「流れ作業」の部分品になることによって「専門馬鹿」になる恐れがあるとか、さらに職場での分業を拡大して「社会的分業」の必要性にまで視野を広げることができなかったことなどは当然であろうが、「国富論」の重要な柱のひとつが幼い日の彼の釘工場の場面での観察が原型となっていることだけは確かである。

その五。さらにまた彼の教育環境も彼にとっては恵まれた「存在」であった。彼に決定的影響を及ぼしたグラスゴー大学についてはあとで触れるが、それ以前の郷里のカーコートでの教育環境も恵まれていた。その学校の校長は総明で温和な人物であったばかりではなく、当時の教会当局の圧力に抗して聖書とその解釈だけで子供たちの頭をいっぱいするようなことを避ける教育方針をとっていた。だから読み書きと算術のほかに地理や歴史についての知識も与えていた。またラテン語も教えた。そして卒業に近づいた頃には彼は教科書用書き改められたエウトロピウスを殆んど暗記しており、ティトゥス・リヴィウスやタキトゥスの著書を自由に読みこなすぐらいにラテン語が熟達していた。なおこの頃土地の牧師についてギリシア語の手ほどきを受けている。これで一応グラスゴー大学への進学の準備が全くととのったわけである。

I—Bの段階—青年期の「存在」

青年期はグラスゴー大学とオクスフォード大学の学生時代の彼をとりまいている「存在」である。

グラスゴー大学の始まるのは春であるが、その前年の1737年の秋にはグラスゴー市の伯母のもとに彼は落ちついてた。これまで田舎の地方小都市に母とともに暮した彼がいきなり大都市に住んだのであるから、彼にとってはなにごととも驚きがひとしおであったであろう。目ぬき通りの高層の家や立派な店や巨大な教会の建物、クライド湾沿岸の貿易用の倉庫、さらに貿易船など、見るもの、聞

くものすべてが彼には驚きであった。

ところで1738年の春には彼はグラスゴー大学の「ピージャン」(bejan)になった。大学の1年の論理学のクラスの学生たちをピージャン(くしばしの黄色いひよこ)と呼ばれていた。ピージャンを終えて2年生となると、道德哲学か自然哲学のいずれかのコースを選ぶことになっていたが、彼は道德哲学のコースを選んだ。

ところが彼の入学の春に「大学の顔」であった道德哲学のハチスン教授をめぐって、大学全体が騒然としていた。というのは、ハチスン教授は大学当局の宗教的空気と教会の科学に対する規制に反対しており、講議などもすでに死語のラテン語ではなく、英語で行い、講議に熱中すると「自由にあやつれる」スコットランドの方言を用いたりした。これらのことがらを牧師を中心とした大学当局の長老会議が異端だとして、ハチスン教授を免職しようとしたのである。スミスは当時まだピージャンだったので、正式には彼の学生ではなかったが、彼の講議にはなん回か出席しており、また学生たちのハチスン教授を称賛し、牧師たちを非難する会合にはかたすみでだまって耳を傾けていた。幸に大学の評議会の「大学の独立」、いまでいう宗教と学問の分離の主張を大学当局は受け入れざるを得なかった。グラスゴー大学が当時としては最も進歩的な大学であったからであるが、その背景にはグラスゴー市が大商業都市であり、国際貿易港であったことを見逃してはならない。スコラ哲学で武装した旧態依然たる牧師たちの長老会議が「人間の自由」の主張に敗退せざるを得なかったのは当然であろう。

それはともかくとして、ハチスン教授が留任したことは、スミスにとって極めて重要な意味を持っていた。というのは、スミスにとって彼は「決して忘れることができない恩師」であったからである。スミスは彼の指導のもとに、神の教義ではなく、ヒューマンイズムの原則にもとづいた自然法の創始者であるオランダの法学者フーコー・グロティウスや実験と経験にもとづく認識方法を基礎づけた哲学者フランシス・ベイコンやジョン・ロックの著書なども読んだ。彼はギリシア語をさらに勉強したので、古代のギリシアの作品を原書で読むこともできたし、また大学の授業になかった

フランス語を個人教師から習ったりした。とにかく当時のスミスは貧欲なまでに読書と勉学に明け暮れていた。と同時に彼は自然哲学の講義も熱心に聴講し、とくに数学にひどく熱中した。ハチスンの友人であったシムスン教授は、ニュートンの天才であることに畏敬の念を彼に抱かせた。だから教授たちの間では彼の勉学振りに注目しはじめていたし、また学生仲間でも畏敬的であった。といって学生仲間のリーダーになったりすることは、彼の性格に合わなかった。また彼は大学総長の娘が主催するダンス・パーティに出席したが、多くの学生は彼女の美貌と理知に魅せられて出席したが、彼はあまり彼女には関心がなかったようである。彼はすでに政治家や実業家になるよりも、むしろ専ら学究の途を歩むことに求めているようである。彼は1740年の春、17才でM. A.の学位を得たが、オクスフォード大学のベアリオル・カレッジのスネル奨学金を得てオクスフォード大学に進学する機会が与えられた。

当時のスコットランドがイングランドと合邦したのは1707年のことであるから、すでに40年近く経っている。この合邦はスコットランドが敢えて政治的独立を誇示するよりも、イングランドと合邦することによってイングランドの開拓した広大な市場圏に便乗して貿易によって、国内の経済発展を促し、貧困に悩む危機を打開するためであった。名を棄てて敢えて実を掴んだのであった。だがその実りが開花するにはまだ若干の期間が必要であった。スミスがオクスフォード大学に入学した頃のスコットランドはまだ貧困の域に低迷していた。彼が二人の道連れとともにイングランドに向った途中で、スコットランドの羊がやせていたがイングランドの羊は毛なみもよく丸々と肥えていることを目撃したし、またイングランドの畑がよく耕されており、立派な垣で囲われていたのを目にして、イングランドはスコットランドよりも豊かな国であることをまざまざと見せつけられた。そればかりではない。彼がはじめてカレッジの食堂で食事をしようとしている際に、いつもの癖で皿の前で瞑想にふけているのをカレッジの給仕が、「早く召しあがって下さい。あなたのお国のスコットランドではこのような肉はおそらく見たこともないでしょう」とスコットランド人の彼

を蔑視した態度で彼に云ったと伝えられている。このような屈辱感を彼はいち早く味わったのである。そのうえ彼が大きな期待を持ってはるばるスコットランドからやって来たのに、グラスゴー大学のように立派な教授がいなくて、何も教えてくれないし、また教えるだけの能力のある教授がいなかった。ほとんどはイギリス国教会の牧師であり、教えるふりさえしなくて、むしろ陰謀や政治談義や学生たちの監視のみに明け暮れていた。このことを「国富論」のなかで彼らをこっぴどくやっつけている。よほど失望したのであろう。さらにグラスゴー大学の学生時代と違って、オクスフォードでは友だちはなかった。というのは、当時のオクスフォードの学生の大部分はイギリスの貴族、小地主、牧師の子供たちで、スコットランド人を蔑視していた。スミスはスコットランド人であるから疎外されるのは当然である。そのうえ彼は無名で、金持でもなかった。多くの学生たちは、無為に過したり、騒々しい酒宴をひらいたり、政論にときを過したりしていたので、いつも書物を手にしている寡黙なスミスを疑いと敵意をもって見はじめたのも、これまた当然であろう。

こうした疑惑と敵意のなかでの彼の唯一の避難所は、彼の最も好きな読書に時を費すこと以外になかった。だが大学当局は「思想善導」の名のもとに読書範囲を制限していた。最新のイギリス、とくにフランスの作品は疑わしい目で見られていた。スミスはその制限下で、イギリスの古典、シェクスピア、ミルトン、ドライデンはじめ、フランスのラシーンの作品、またヴォテールやモンテスキューの著作にまで読書範囲を上げた。彼はこれらの書物を、町の小さな本屋で買って、だぶだぶのマントの下や裾長の上衣の下にひそかにかくして学寮にもち帰らなければならなかった。ところが図らずも彼の4年生の21才のときにデヴィッド・ヒューム事件という不愉快な事件が起きた。「人性論」を出した若いヒュームは、彼の大学では危険な懐疑論者、無神論者と見なされていたので、大学ではこの書物を禁止していた。ところが当時有料図書館の役割を果たしていた書店からスミスがヒュームの書物を持ち帰るところを学監の目にとまり、その夜それを読んでいるところをとりおさえられた。なにぶんこんな事件は大学当局ではは

じめてのことなので、スミスは厳重な警告をされるだけで終わったが、以後さらに彼に対する監視の眼が強化されたのは当然であろう。

このような大学の空気は彼にとってはまさに「冬の宿」(阿部知二の作品)であった。グラスゴー大学の学生時代の明るい自由な空気の「春の宿」と比べると、まさに雲泥の差であった。「冬の宿」といえば、彼の学寮も粗末な室で、とくに冬の寒気は病身がちな彼には耐えられなかった。母親に早く毛糸の靴下を送るように手紙を出したのもうなずける。彼がオクスフォード大学に敵意を抱き、二度とここをたずねようとしなかったのも、もっともであった。

ところで彼は1746年の秋にスコットランドの友人とともにオクスフォードを離れて、エジンバラに帰った。それは「若き僭王」チャールズ・エドワード・ステュアート王子の1745年の蜂起をきっかけに、スコットランド人をホイッグ黨員と見なし、ジャコバイト的な学寮も1745年の秋から不安な空気に充ちていたので、スミスの生活は耐えがたいものになっていた。さらにその蜂起は失敗に終わった後も、スコットランド人への敵意はなくなり、ロンドン議会はスコットランドの民族衣装の有名な格子縞のスカートと肩掛けの着用を禁止する法律を制定した。このような馬鹿げたことに腹を立てて、家事上の都合で帰国しなければならなくなったと大学当局に申し出て、大学を離れたのであった。

なお学寮を離れる前の1744年に農業の有名な改革者ジェスロウ・タルの農場を見学して、産業革命の予兆がすでに農業の面で起っていることを体験しており、それに刺激されてか農業について古代ローマ人の大カトーやコルメラの著書も読んでいる。

以上が彼の幼年期と少年期と青年期の「存在」であった。この時期の彼は専ら自己形成の学習時期であった。当時の彼には「存在」の背後にさらに巨大な「存在」があったことにはまだ気づいていなかった。その巨大な「存在」こそ「経済の成熟」であった。

Ⅱ 「国富論」への道の「存在」

A. しばしのふるさとでの雌伏

ところで彼はオクスフォードからふるさとに帰

って2年間を母とともに暮らした。彼は広い学識を身につけて帰ったものの、いまだ自分の将来について明確な見通しを持ってはいなかった。

当時のスコットランドはスコットランドを思想的に推進させる「新しい星」の出現を望んでいた。スミスはイギリスとフランスの文化を身につけた生粋のスコットランド人であった。その「待望の星」がスミスであることに眼をつけたのが、オズワルド卿の子息で、町では最も教養のある人間として知られていたジェイムズ・オズワルドであった。彼は父の親友であったことについては、さきに触れた。その彼を介して紹介されたのが、エディンバラの富裕な地主で著名な法律家であり、作家であり、そのうえ科学や芸術の庇護者として知られていたヘンリー・ヒューム(後にケイムズ卿となる。哲学者のデイヴィッド・ヒュームとは別人)であった。ヒュームは彼こそまさに「待望の星」であることを見抜いた。それは1748年の春のことであった。そして彼の生涯を通じてのよき庇護者となった。ヒュームはエディンバラの文化人たちのボスであった。スミスはこのヒュームの奨めで文学、自然法などについての連続講義を行っている。この三回目の講義で、自然の運行について論じ、分業や貿易の自由についても、まだ「国富論」で展開された明確の姿ではないが、論及している。

ところがその頃母校のグラスゴー大学で論理学の教授の欠員補充のあることを耳にして申し込んだところ、幸いに1951年1月の大学評議会で満場一致でパスした。

B. グラスゴー大学教授時代の彼をとりまく「存在」

彼の「存在」がグラスゴー大学の教授になってから、これまでの「狭かった存在」が急に拡大した。これまでは学生として勉学に明け暮れていたのが、こんどは教授として教えるばかりではなく、活気に満ちたグラスゴーの市民や商人たちやクラブのメンバーとの交友を通して、また広い見聞を通して現実の動きを体験することができた。彼の大学教授時代は「国富論」形成の時期ではあったが、まだその芽が漸く出はじめた頃であった。その頃産業革命が漸く姿を現わしかけていた。

ところで彼が死ぬ少しまえに書いた手紙に、彼

がグラスゴーで過した13年間を自分の生涯のもっとも幸福な時期だといっている。この時期に無二の親友となった当時40歳のデイヴィッド・ヒュームとエジンバラのケイムズ卿邸で出会ったし、また若いジェームズ・ワットやブラック博士などともグラスゴー大学で知り合った。そればかりではない。グラスゴー大学はブリテンの多くの大学と違って迫り来る産業革命の雰囲気の中にあっただし、グラスゴーのまち自体も活気に充ちあふれていた。

グラスゴーのまちこそはまさにスミスの経済学の実験室であった。だが、それが実を結んで「国富論」となるのには、まだかなりな年月を必要とした。

C. バックルー公爵とヨーロッパ外遊——新しい彼にとっての「存在」

ところで彼は1752の年に、グラスゴー大学の論理学の教授から、道徳哲学の教授となった。この講座は彼が「決して忘れることができない」恩師ハチスンがかつてポストについていた。12年間彼はその教授をつとめたが、1757年に出た「道徳情操論」はその成果であった。その著者こそは自分の義理の息子である幼いバックルー公爵の未来の教育者であると考えたチャールズ・タウンゼンド（のちの蔵相）は、グラスゴーで彼と会った。タウンゼンドの考えが5年後に漸く実現して、若いバックルー公爵とヨーロッパに旅した。パリーの自由思想家たちや重農学派のケネーたちとも直接会うことができた。これまで文献のみで知っていたのが、現地で彼らと交友を重ねることができたわけである。さらにまた彼の尊敬していたヴォルテールにも会っている。とにかく彼の「存在」が世界的規模にまで拡大した。

D. カーコーディでの「国富論」の執筆・完成

彼がバックルー公爵と外遊するに際して、グラスゴー大学の職を退き、バックルー公爵からの年金によってこんごの生活が保証された。だから彼は安んじてふるさとの母たちと暮して、「国富論」の完成に全力投球すればよかった。そしてひとまず脱稿した原稿を携えて、ロンドンに赴いたのは1773年の春のこと。だが脱稿が近づくにつれて彼の健康をこわし、ロンドンに旅立ったときに、親友ヒュームに万一の場合の処理について依頼する

必要を感じたほどであった。ところがロンドンに到着してその原稿がまだ未完成だと気づき、加筆訂正を加えてストラーンの印刷所に渡したのが2年あとのこと。彼はロンドン滞在中に、ロンドン「文学界の偉大な帝王」ジョンソンの主宰する「文学クラブ」の会員になっている。そして1776年3月「国富論」が出版された。本書は彼自身の予想を越えて生存中に数版を重ね、またフランス語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語、デンマーク語でも翻訳された。とにかく「国富論」は大成功を収めた。「この孤独なスコットランド人は、ただひとつの著作刊行によって、人類の幸福というものに対して、歴史上その名をとどめているあらゆる政治家や立法家たちが力を合わせてなし遂げたものよりも更に多くの寄与をした」と、イギリスの文明史家バックルーに云わしめている。「国富論」がこれだけの声価を高めたのは、経済の成熟期における現実の事実を、恵まれた「有在」と分析力、総合力、観察力とたゆまない努力の結果、体系化したところにある。それは単なる架空のことがらをでっちあげたのではなく、誰人も承認せざるをえない本質的なものをとらえることに成功したからである。

E. 幸福な彼の晩年

彼は文字通り多幸な晩年をエディンバラで送った。彼は1778年2月にカーコーディでスコットランドの関税委員の公式な任命書を手にして、「スコットランドの心臓、ブリテンの第2の眼」といわれ、また「北方のアテネ」であったエディンバラに移住した。そしてここが彼の最後の住処（ultimus domus）となった。彼の生活はバックルー公爵からの年金で終身保証されていた。そのお陰でふるさとのカーコーディで隠遁生活を送りながら「国富論」を書きあげることができた。幸いにその書物が予想外の好評で、外国でも翻訳されたし、第2版も1778年に出ている。そこで彼はバックルー公爵の年金にいつまでも甘えていることは彼の生き方としては心よしとしないものがあると考えて、ここらあたりで年金を辞退すべきであると考えたので、敢えて関税委員となったのであろう。

彼はエディンバラに移住してから間もなく、ブラック（現代化学の創始者）とハットン（現代地

質学の創始者の一人で、ライエルの先駆者)とともにオイスター・クラブを創設している。なおこの2人はスミスの遺言執行人となっている。このクラブのチャーター・メンバーはアダム・ファerguson, カレン, マッケンジー, デューガルド・スチュアート, ロバート・アダム, デア卿, そのほか5, 6人の人たちであった。また1783年には彼はエディンバラ大学のロバートソン総長とエディンバラで王立協会を設立している。さらにまたグラスゴー大学の名誉総長にも選ばれている。そのうえ彼の著書はつぎつぎと多くの国ぐにで籍訳されているし、生存中に第5版, また「道徳情操論」も第6版が出ている。ただ残念なことは、彼と最も親しかったデヴィット・ヒュームは「国富論」の初版が出た間もなくの頃逝去しているし、また、彼の母も1784年に無くなっている。さらに晩年に近づくにつれて、ケイムズ, ストラーン, カレン, ジョンソン, ガリックなどを失い、かつての友人たちの範囲も次第にせばまっている。彼自身の体の衰えも甚だしくなってきた。だがその間であっても版を重ねる「国富論」の加筆・訂正に余念がなかった。

彼は晩年2回ロンドンに旅している。1回目は1784年で、はじめの予定は2カ月であったのがロンドン滞在期間は意外にのびた。2回目は1787年4月の旅で、病気治療のためであった。幸いに病もよくなり、首相のウィリアム・ピットと知り合った。首相は彼を経済問題の非公式の顧問に任命している。とにかく彼の最後のロンドン訪問は、その人柄と学問的声望によって栄光に充ちたものであった。

彼は1790年7月17日の朝、故人となったが、死の直前に「わがことなれり。“well-done”」と口にしたと伝えられている。彼は学者としては極めて多幸な生涯を終えた。ここで想起することは、スミスの死から1世期ほどあとに、異郷のロンドンで逝去したマルクスのことである。彼はスミスとは全然立場を異にしているが、スミスと同じように偉大な学者であったことは何人も認めるであろう。だがマルクスはスミスと異り、生前は決して多幸とはいえない。学者の生前における禍福の運命をどうとらえたらよいであろうか。それはとにかくとしてスミスは学者として稀に見る多幸な

生涯を終えている。

三

I スミスの「存在」の限界

私は「国富論」の完成とその輝かしい成功の跡を、著者スミスの成長と彼の「存在」との関連に焦点を絞って考察してきた。彼の生来の学者としての素質が単なる素質として終らずに「国富論」として立派な成果となったのは、彼の「存在」が極めて恵まれていたからである。彼は1723年スコットランドのカーコーディという小さな港まちに生れたが、当時のスコットランドはイングランドと合邦(1707)してから20年近く経っていたが、スコットランド側の合邦の狙いは政治的独立よりも遅れた経済の発展にあったが、その狙いが完全に実現するにはかなりな年月を必要とするから、スミスの生存中は果されなかったといえる。彼がグラスゴー大学を終えてオックスフォード大学に留学するために、途中で眺めた田畑が、イングランドに入るとよく肥えており、また羊の群れにしても色つやもよく太っていたことを目撃した。そればかりではなく、彼が大学入学早々食堂でボーイにこんな立派な肉はスコットランドで見たことがないだろうとスコットランド人なるが故に蔑視された苦い思い出がある。当時のスコットランドはそれほど貧困であった。この点についてはさきに触れている。その代わりに、スコットランド人は何事にも勤勉で、節約でつましい生活態度を身につけていたし、また優れた文化人も多く輩出している。「家貧しければ孝子出ず」といわれているように、スコットランドはハングリであったからであろう。

彼は生粋のスコットランド人であったが、「公平な傍観者」としての眼を持っていたから、イングランドのよさも充分理解していたし、彼がグラスゴー大学教授時代には優れた同僚に恵まれ、グラスゴー市民との交りを通して、彼の「存在」の幅を拡がり、さらにフランス外遊によって、その幅が一段と拡大された。その幅の拡大を「国富論」に集約し、体系化したともいえる。他面において、「国富論」の対象であった「経済の成熟」も次第に進んでいた。「経済の成熟」といっても、未開

時代とスミス時代とは格段の差があった。スミス時代では農→工から商の段階に入っていた。それに手仕事の小規模の生産工程が、機械と動力と燃料の導入によって、次第に大型工場の経営も可能になった。だがスミスの時代はまだそこまで行っていなかった。だからマルクスの言葉を借りれば、彼はマニユアクトゥア時代の最後の経済学者であった。彼は産業革命の発端しか見ていなかった。革命の規模やその社会的影響について予想することができなかった。それとともに分業にしても大規模工場や社会的分業については目がとどかなかった。彼のとらえた分業の実態は、幼少年期にカーコーディで経験した小規模工場の分業に深く根ざしている。彼のグラスゴー大学教授時代でも製造所や工場を訪れ、いつも観察したり、いろいろ質問をしたことはカーコーディの幼少時代と同じであった。彼の友人たちがエディンバラを訪れると、いつも彼らを皮革工場や製造工所へ案内した。たまたま若いバックルー公爵の後見役であったチャールズ・タウンゼンド（のちの蔵相）がエディンバラを訪れた時も皮革工場に案内したが、その際彼は足をすべらして悪臭のどろどろした溶液のなかに転落したというエピソードが残っている。とにかく彼は読書で得た抽象論ではなく、彼自身の現実の体験を生かして「国富論」を書きあげている。だが彼の時代の「存在」は、手工業の域を脱していなかった。さきにも触れたように分業にしても職場における数人の職工による分業であった。工場制機械工業が漸くその歩みを始めたのは1760年代に入ってからであるが、彼の「国家論」執筆中はまだその予兆だけであった。天才的ともいえる彼の洞察力をもってしても、彼の「存在」の制約によって、その後の素晴らしい展開を見抜くことができなかった。ワットの発明による機械の導入、新しい燃料の自国産の石炭の使用によって、工場制機械工業の導入に最も有利な条件（存在）がイギリスには恵まれていた。これらの工場生産によって経営者の利潤が倍加したが、大規模工場建設には一個人の経営者の資金では不可能であるので、「株式会社」の設立によってその巨額な資金を調達した。かくして資本主義制度が確立するが、スミスの「存在」はそれ以前のことである。だから彼は「株式会社」についてもあ

まり賛成ではなかったようである。ここにも彼の「存在」の制限があった。

Ⅱ 彼以後の「存在」の新しき進展

彼の「存在」はその後新しき進展を見せた。動かないと見えた「存在」の変化であって、それは産業革命の進行によって資本主義制度が確立したことであった。「国富論」の出版の少し以前にスタートを切った産業革命が漸くその進展を見せて、資本主義制度が次第に社会体制化してきた。しかも、その際産業革命のプラス面のみが表面に出て、いまだマイナスの点が顕在化されていなかった。スミス時代の「経済の成熟」が漸く進展を見たのは1800年代に入ってからで、マルサス、リカードウなどの活躍はスミス以後の「存在」の新しき進展を背景としていたが、まだ資本主義制度のマイナスの面はそれほど露呈されていなかった。だからスミスの「存在」としての「経済の成熟」は同じ路線を歩いていたので、スミスの「国富論」の枠組のなかで、彼の理論の精密化を試みればよいわけであった。とくにリカードウは科学的抽象化と歴史的現実を軽視したきらいもあることから、彼の主著「政治経済学と課税の原理」（1817）などは、専門の経済学者の読む書物であって、一般の教養のある人びとのためのものではなかったといわれているほどである。それはともかくとして、両者はスミスの「国富論」の枠組のなかで、マルサスはスミスの流通視角を受け継ぎ、リカードウは生産視角を発展させ、両者の間に激しい論争が展開された。かくして19世紀前半はスミス経済学の内部の精密化の時代に入ったが、J.S. ミルがその古典的経済学の最後の締めくくりの人であった。

Ⅲ スミスと異った「存在」

ところが18世紀後半に入ると、産業革命のプラスの面とともにマイナスの面が漸く顕在化してきた。この新しい「存在」はスミスの時代とは全く異ったものであった。そしてこの新しき「存在」をどのように経済学に反映させたらよいかについて、二つの対立した経済学派が誕生した。一つは近代経済学派であり、もうひとつはマルクス経済学派であった。前者は産業革命のもたらした資本主義制度を肯定し、マイナスの面よりもむしろプラス面を重視する立場に立っていたが、後者はマイナスの面を重視するばかりではなく、このマイ

ナスの面の源泉は資本主義制度そのものにあるとして、その制度の変革を目指した。そして資本主義制度の産んだブルジョワとプロレタリアートの階級抗争を経て、後者の勝利に終ることを理論によって裏づけを試みた。マルクスは在独中すでに「賃労働と資本」や「経済学批判」の書いているし、盟友エンゲルスも「イギリスにおける労働者階級の状態」、またエンゲルスの共著で「神聖家族」を著わしている。ドイツを亡命して、ロンドンに移住してからは、エンゲルスから生活費の扶助を受けながら、「剰余価値学説史」や「資本論」の著書も出している。

ところで「近代経済学」が形成されるまでにはかなりの年月を経ている。スミスが当時のイギリスの「存在」の本質的なものを体系化して「国富論」をまとめあげたのは、産業革命の初段階の時期であった。当時のイギリスは産業革命の展開される好条件に恵まれていたので、スミスの「国富論」は経済学のバイブルと見做れ、しかもイギリスのみがその「存在」であったから、イギリスの経済学者たちによって経済学が展開されたのは当然であろう。だからスミスの遺産を集大成したJ.S.ミルの業績が「古典派」の代表的なものであった。だが産業革命の進展とともにプラスの面とともにマイナスの面が露呈されてきた。それとともにその「存在」の変化に対応して新しい経済学が出現したのもこれまた当然であろう。その新しい経済学は二つに大別することができる。ひとつはスミスの路線(自由主義の是認と資本主義体制の堅持)を基本的には守ろうとするものであり、ほかのひとつはスミスの路線を打破しようとするマルクス経済学であったことは、さきにも触れた。

ここではまず前者の路線について簡単に触れてみよう。スミスの遺産がJ.S.ミルによって集大成化されて「古典派」となったが、新しい「存在」に対応して「新古典派」が形成された。それはJ.S.ミルから最も影響を受けたケンブリッジ大学のA.マーシャルであった。このことはミルの古典派に対するジェヴォンズやポエーム・パウエルクの批判に対して極力擁護したことからもうかがえる。もちろんA.マーシャルは新しい「存在」に対応した経済学者であったから、ミルの「古典派」の経済学をそのまま踏襲しなかった。「新古

典派」といわれている所以である。そしてマーシャルは当時まだ30才という驚くべき若さのA.C.ピグーを後継者に択んだ。彼はその後厚生経済者として新しい「存在」に対応した活躍をしたことは衆知の通りである。マーシャルとピグー、それにピグーの後任となったD.H.ロバートソンの三人によって「新古典派」の路線が維持された。ロバートソンはマーシャルの忠実な祖述者であった。なおその頃のケンブリッジ出身者に注目すべき経済学者が二人いた。A.L.ボーレイとR.C.ホートレイの二人であった。ボーレイはケンブリッジでは数学を勉強したが、彼の指導教授によってマーシャルに紹介された。マーシャルは彼の優れた数学的支能を見込んで何かとアドバイスをしている。その頃マーシャルの影響もあってか数学者から経済統計学者に変身している。そしてマーシャルの推薦によって新設されたロンドン・スクール・オブ・エコノミックスの統計学の非常勤講師となり、さらに教授となり、引退する1936年まで教鞭をとっていた。その間彼は賃銀と国民所得について経済統計の収集と編集をしたり、社会科学への統計的手法の導入を企てたり、数理経済学および計量経済学の発展のために活躍しているが、とくに調査調査の手法を開拓した「ロンドンの生活と労働、1930—35年の新規調査」の公刊は、標本調査の開拓者として、彼の名を不朽ならしめている。

もう一人のホートレイもケンブリッジの出身者であるが、大学では数学を専攻した。だから彼も経済学に関しては正式な教育を受けなかったが、卒業後大蔵省の役人となったこともあってか、経済学にも関心を抱き、1913年に「好況と不況」、続いて1919年には「通貨と信用」の書物を出している。とくに「通貨と信用」は教科書として使われたりして、当時貨幣論の標準的な著作として認められていた。大蔵省を辞してから1952年95才でなくなるまでエコノミストとして執筆に精力を傾けていた。そんなこともあって、王立経済学会の会長を勤めたり、王立国際問題研究所の国際経済学ヘンリー・プライス記念講座教授に選ばれたりしている。さらに英国アカデミー会員、ロンドン大学名誉博士(経済学)、ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジの名誉フェローにもなっている。

以上の5人のケンブリッジ出身者のほかに、ユニヴァーシティ・カレッジの経済学教授ジェヴォンズは功利主義的微積分学を導入して、ミクロ経済理論の開拓者となっている。またオクスフォード大学教授のF.Y.エッジワースは「数理統計学」の導入によって、経済学の新しい分野を開拓している。

以上の人びとはいずれもイギリスを母国としていたが、F.A.ハイエクだけは異色であった。彼はオーストリアの名門の出身で、ウィーン大学を卒業した後、ロンドン大学で経済学と統計学を教えた。その後アメリカに渡ったり、フライブルク大学で経済政策の担当教授になったりしている。ザルツブルク大学の名誉教授となり、1944年にはロンドン大学から名誉博士号を受け、また同年ブリティッシュ・アカデミー会員に選出され、経済学部門でノーベル賞を受けている。このように彼はほかのイギリス出身者の経済学者たちとは全く異色な歩みをしており、いわば渡り鳥のような経歴を持っていた。

もちろん以上の8人の経済学者たちのみが「新古典派として、近代経済学への途を用意した」とはいえない。だがこの8人はD.P.オブライエンとジョン・R.プレスリー共編の「近代経済学の開拓者」、1981。(邦訳井上琢智, 上宮正一郎, 八木紀一郎他, 昭和堂1986刊)にとくに取りあげているだけの業績をあげていることは認めねばならないであろう。そのほかにも多くの取りあげねばならなかった経済学者がいた筈である。だがこれらの8人の輝かしい業績が近代経済学生成の途を用意したことだけは否定できないであろう。

ところで彼らは「古典派」に見られなかった新しい眼(ミクロとマルクの視角や数学の導入など)で新しい経済学論を展開した。しかもそれはイギリスの「存在」を背景として、その「存在」の中心地であったロンドンの諸大学の教授たちの手によって主として行われた。当時のイギリスは「世界の工場」としてとくに先進国の名を独占していた。だからイギリス人である経済学者たちは「古典派」の遺産であった自由主義と資本主義体制には共通な認識を持っていた。ただ異った点は「古典派」とは「存在」そのものの同じ路線が進展しただけであった。その路線の進展を背景として展開した

のが「新古典派」の人たちであった。

ところが1930年代の前半になって世界的大不況が発生し、その波がイギリスにも及んだ。なぜこのような不況がイギリスにも生じたのであろうかを問いただしたのが、J.M.ケインズの「雇用・利子および貨幣の一般理論」、1936.であった。彼はマルクスが世を去った1883年にケンブリッジ大学の論理学教授J.M.ケインズの長男として生れて、ケンブリッジ大学でA.マーシャルのもとでイギリス古典派経済学を身につけた。一時官界に身を投じたが、やがてケンブリッジ大学に帰って経済学者として幅広い活動をしている。ところで1930年代の前半の世界的大不況は彼の50才直前のことで、学者として最も成熟した時期であった。その彼がこれまで身につけた完全雇用を前提にしたイギリスの伝統的経済学では解決できない不完全雇用(いわゆる非自発的失業)の問題に直面したわけである。資本主義体制の確立とともに巨大な資本ストックの蓄積と大量の産出物の生産が可能になった時期になぜこのような大不況が勃発し、多数の失業者が世に溢れたのであろうか。なぜ「豊富の中の貧困」という矛盾した現象が生じたのであろうか。その原因を探って、その対策を研究したのが、さきに触れた彼の書物であった。だから彼の経済学が「不況の経済学」といわれている所以であろう。なおさきの彼の書物が「一般理論」と題されているのは、彼の理論が完全雇用の場合も不完全雇用の場合も含んでいる理論構成であることを意味していることを念のために附記しておこう。

ところで彼が「一般理論」の書物で提起した理論は、自由放任の経済機構ではいわゆるデレフ・ギャップやインフレ・ギャップが必然的に生じ、それを自動的に除去されないことは現実に見られる通りであるから、その際は政府が最小限度に手を出して、インフレを伴わない完全雇用の実現が可能であるというのであった。だから「スミスの見えざる手」の自由放任の時代は終わったといえる。だから彼の理論はイギリスの伝統的経済理論への「造反」だといえる。といって彼はマルクス主義者のように一切の悪の根源は自由主義と資本主義体制にあるとする立場には反対して、現在の体制そのものの維持する立場に立っている。だから適

切な財政政策と金融政策をとることによって、現代のさまざまな弊害を除去し、資本主義体制を維持しながら、経済発展が可能であるというのが彼の理論であり、また彼の確信でもあった。

彼の「一般理論」は「造反」だといったが、それはあくまで同じ陣営内での「造反」であって、「古典派」と「新古典派」に対する「反古典派」としての「造反」であった。ところで、彼の「造反」は「ケインズ革命」といわれているように、これまで見られなかった新しい理論であった。彼の投げかけた問題はいち早く世界の資本主義体制の共通問題となった。このようにケインズの「一般理論」をとらえると、「近代経済学」はこの書物の出版を契機としてスタートしたといえよう。この間の事情についていまま少し立入って触れてみよう。

その一。1930年代になると、これまでのように経済学がイギリスの学者たちの独占物でなくなってきた。もちろんそれ以前でもほかの国ぐにの学者たちによって経済学が語られていたが、イギリスの経済学を何らかの形でモデルとしていた。ところが20世紀に入ると、とくに30年代の世界的大不況によって、経済学がひとりイギリスの経済学者たちの独占物ではなくなってきた。というのは、この大不況の嵐は単にイギリスのみならず世界の先進諸国に共通に吹き荒れたからである。もちろん大不況の嵐はそれぞれの国ぐにによって程度の差があったし、またそれぞれの国ぐにの対応の仕方も異ってはいたが、共通の問題でもあった。だからイギリスでも同じように対処しなければならなかった。しかもイギリスの「存在」そのものがほかの先進諸国と同列となった。さらに第二次大戦以後は、アメリカに嘗っての地位をゆずらざるを得なくなった。その要因には数々あるであろうが、イギリスがこれまでのように「世界の工場」でなくなったこと、かつての植民地がそれぞれ独立したこと、それに軍事力の低下などがその主要因となっているといえる。これらの国際情況のほかに、国内的事情としては、大不況の嵐がイギリスでも「豊富の中の貧困」として非自発的失業者が溢れてきたからである。だからこのイギリスの「存在」自体の変化が、直ちに反映してイギリスの経済学もこれまでのようにイギリス人の経済学

たちのみの独占物ではなくなってきたからである。

その二。そのうえ国際的に見れば、経済学が多彩になった。このことは経済学がイギリス人のみの経済学ではなくなり、国際化したことを意味している。とはいっても、イギリスは経済学の始祖といわれているアダム・スミスを生んだ国であり、またケインズの生んだ国である。とくにケインズ以後の理論の多くは何らの形で彼をめぐって展開されている。たとえば、「ケインズ伝」(1951)の著者であり、「ケインズの忠実な弟子」でもあるハロッド R.F. Harrod は、イギリス王立経済協会の会長をしたり、オクスフォードの国際経済学の講師としたりして、イギリスでは最も指導的役割を演じているし、また1930年代の世界的大不況は有効需要の不足から生じたものであるから、この不況から脱出し、経済の長期的な均衡的發展を目指すためには、政府の財政支出を中心として、有効需要を促進させる必要があると説いたドーマー (E.D. Domar) の「経済成長の理論」も然りであった。彼のこの理論が池田内閣の所得倍増計画に影響を与えたといわれている。

またケンブリッジ出身のロビンソン (J. Robinson) は新古典派のマーシャルを批判したスラッファの論文「競争的条件のもとにおける収益法則」から影響を受けて「不完全競争の経済学」も現わしているが、ケインズの「一般理論」を念頭において、「The Accumulation of Capital」1950.を出している。ロビンソンのこの書物も無視できない。ところで52年以後ケンブリッジの経済学でリーダー役をつとめているカルドア (Nicholas Kaldor) の多彩な活躍も注目すべきであろう。彼は学界のみならず、イギリス、ヨーロッパ、国連、さらにセイロン、メキシコなどで多くの委員を務めたりして幅広い活動をしている。彼は1908年ブタベストの生れであるから、ほかの多くの経済学者とは出身国が異っており、またケンブリッジの出身ではなく、ロンドン・スクール・オブ・エコノミックスの卒業生である。とくに理論面で注目すべきは、ビグーの「厚生経済学」を補強して「新厚生経済学」を展開したこと、景気循環論では景気循環に関する一つのモデルを提示したこと、また経済成長論では「なぜある社会

では他の社会よりも非常に速く成長するか」の成長モデルを提示したことなどは見逃してはならない貢献であろう。

なおケンブリッジの出身ではない理論経済学者ヒックス (J.R.Hickes) も無視してはならない。彼はオックスフォードの近くのレミングトン・スバに1904年生れてオックスフォードに学び、1926年22才の若さでロンドン・スクール講師となり、そこで足掛け11年間過した。この期間こそ彼の学者の基礎が固った。だからロンドン・スクールこそ彼の生んだ母校だといえよう。その後彼は一時ケンブリッジにも関係したが、1938年にはマンチェスター大学の教授となり、1945年には母校のオックスフォード大学に迎えられ、現在教授となっている。彼の業績は多彩であるが、1. "Value and Capital," 1939. と 2. "Social Framework," 1942. と 3. "A Contribution to the Theory of the Trade," 1950. の三書がとくに注目すべき著書である。1の著書では、効用理論を排除して選択理論を確立して、「消費者選択の基本方程式」の定式化を目指したこと、「一般均衡理論」の整備・拡充したこと、これはワルラス、パレートのローザンヌ学派の遺産を生かした微視的理論を確立したものであり、さらに比較教学の理論に新しい展開を試みた点なども見逃してはならない。つぎに2の書物は、国民経済の実体を数値的把握の形式としてとらえ、経済循環の実体を各経済主体の活動とその相互連関においてとらえることができるとして、ケインズがはじめてソーシャル・アカウンティングの手法の原型を提示したのが「戦費調達論」, 1940. である。その書の副題に見られるように「大蔵大臣への提案」であったが、イギリス政府は直ちにこの提案に従って1941年「白書」を出した。その後このソーシャル・アカウンティングの手法が改訂されられて、イギリスではもちろんのことアメリカをはじめ多くの国くにや国連でも採用されており、日本でも1952年以来「白書」を出している。ヒックスはケインズのこの手法を生かして、1942年に「ソーシャル・フレームワーク」と題した経済学の入門書をまとめた。なお「ソーシャル・アカウンティング」の用語は彼の造語であり、それはまた巨視的経済理論の新しい展開でも

あったことも見逃してはならない。さいごの3の「景気循環論」, 1950. では、実態分析に基づいて彼独自の「制約循環論」を展開している。

これらのいずれの書物もそれぞれ彼独自の理論と分析手法が展開されており、一作ごとに学界の注目を浴びていた。

ところで以上の学者とは異ってマルクス経済学者として知られているドップ (Maurice Dobb) の存在を無視してはならない。ドップは1900年にロンドンに生れ、ケンブリッジ大学に学び、1926年同大学の講師となり、数年前に停年退職した。彼は文字通り生粋のケンブリッジ大学人である。彼は果して共産党員であったかどうかは定かではないが、マルクス経済学者であったことだけは確かである。しかも世の常のマルクス経済学者とは異って古典経済学や近代経済学にも通じていた。だから彼の研究活動は広く多面的であったが、マルクス経済学の立場を堅持していた。このことは、資本主義経済発展の伝統的径路をイギリスを例として取りあげた研究（「資本主義の発展に関する研究」）に見られるし、またソ連経済の発展事情についても見られるし、さらに後進国開発の問題を取りあげた際にも見られる。そして伝統的な資本主義的発展の型と計画的なソ連型のいずれが合理的であるか論じて、「人間の努力を刺激し、希望する目的に対して経済的資源を動員できる適当な政治的社会的機構を必要とする」としている（"Economic Growth and Underdeveloped Countries," 宮本義男邦訳「成長と開発の経済学」）。そこに彼がマルクス経済学者であることがうかがわれる。

ところで以上の学者はイギリスの「存在」を背景として主としてロンドンの諸大学の教授たちの著作活動について触れた。だがイギリスの「存在」は第二次大戦を境に経済力や軍事力の面などでアメリカの「存在」にその主導権を譲っている。そこでアメリカの経済学者たちに触れて見る必要がある。

まず最初にアメリカにケインズの「一般理論」をはじめて紹介し、発展させたハンセン (A.Hansen) について。彼は1887年サウス・ダコタ州のピボーグに生れ、1915年ウィスコンシン大学を卒えて、同大学の助手、ブラウン大学や

ミネソタ大学を歴任したあと、1937年ハーバード大学の教授となり、20年近く同職にあった。1956年第一線から退いて名誉教授となったが、学問研究とともにさまざまな委員会や政府・民間の諸機関にも関係している。

彼の経済学研究は景気変動論であって、主として大陸系の経済学者の景気変動論の研究を中心に行われ、続いて貨幣論、金融論、財政学など幅広いものであった。その間の1920—30年代には、「繁栄と不況の循環（1931年）」、「景気の循環論」（1927年）」、「不均衡世界における経済安全」（1932年）」などの著作がある。ところが1936年のケインズの「一般理論」の著作に接して、ケインズの理論をマスターしてアメリカでは代表的なケインジアン学者となっている。ただケインズと異るところは、彼はケインズの欠けている大陸系の景気変動論を身につけていることのほかに、何のために高い経済成長率や国民総生産高の倍増を目指すかについて、彼は単なる投資量だけを考えずに、質的な内容を考慮すべきだといっていることである。だから彼はケインズの内部にあって、ケインズの理論を補強・拡充していたといえよう。

つぎに1940年以来マサチューセッツ工科大学の教授であるサミエルソン（P. A. Samuelson）の存在も見逃してはならない。彼は1915年インディアナ州ゲーリに生れ、シカゴ大学卒業後ハーバード大学院で学んだ。“Foundations of Economic Analysis.”は彼の博士論文であって、のちにHarvard Univ. Press, 1947. から出版されている。シカゴとハーバードで新古典派経済学を身につけ、ケインズの「一般理論」をも摂取したうえで、さきのFoundationsの出版に続いてEconomics, An Introductory Analysis, 1947. を出している。この書物は代表的なテキスト・ブックとされている。なおハンセンがハーバート時代の教え子であるサミエルソンの協力のもとで、乗数理論と加速度原理の相互作用によって国民所得が累積的循環的に変動する過程を理論的に解明している。さらに彼は顕示選好論（the theory of revealed preference）の提唱とか、彼独自の社会厚生関数の考えのもとに「新厚生経済学」を構想したり、ケインジアンとしてマサチューセッツ工科大学での数え子のクラインを指導して博士論文「ケインズ革命」を完成させ

たり、国際貿易論でも独自の理論を展開したり、また「ターンパイク（高速道路）定理」（これは高速道路の利用によって物理的距離よりも目的地により早く到達できるように、経済成長問題にも高速道路のようなものが存在するという定理）の主張などはいずれも彼の得意の数学を徹底的に生かしたものである。彼はこれらの業績によって、アメリカでの経済学のノーベル賞ともいえるJ.B. クラーク賞を受賞されたり、エコノメトリック・ソサエティ会長やアメリカ経済学会会長にも選ばれている。と同時に彼の経済学はあまりにも「技術的」であり、「現実的」でないから「役に立たない」とか、さては「数学」であって「経済学」でないといわれているが、彼にも現実感があったことは、アメリカ政府の経済顧問をたびたびしたり、また「新厚生経済学」で社会厚生関数を構想したり、「ターンパイク定理」を主張したりしたことなどから見て、彼への批判は不当であろう。

つぎに無視できないのは「フリードマン革命」として知られているフリードマンの業績である。彼はシカゴ大学において、F.H. ナイト教授から価格理論を身につけて、そして価格と貨幣との関係をアメリカ経済の実情に即して研究した。それが「アメリカ経済の貨幣的分析」だとか、「アメリカの貨幣統計」だとかの著書となり、さらに「貨幣の趨勢」だとか、「貨幣の循環」だとかの刊行を企んでいると伝えられている。とにかく彼は貨幣の重要性を実証によって示そうとしたのである。

ところで「ケインズ革命」はマーシャルの理論を内部から「造反」したのを、フリードマンはケインズの理論を内部から「造反」したのである。ケインズ理論は完全雇傭と永続的な経済繁栄をもたらすためには、政府の介入と干渉が必要であるという修正資本主義の立場をとり、それが彼の「一般理論」の刊行後30周年の1965年に実現を見た。だがそれから僅か2、3年のちには累進するインフに直面した。そこにはケインズ理論に何か誤ちがあったからである。「通貨政策は無能である」という貨幣の重要性を無視した主張は物価の硬直的状况下においては妥当するが、累進するインフレ状況下では妥当しなくなる。ここで改めて通貨政策の重要性が認識され、フリードマンの実証に

基く「貨幣数量説」が注目を浴びてきたのである。いわゆる「モネタリズム」の新たな登場であった。

さらに見逃してならないのは“The Affluent Society,” 1958. の著者として知られているガルフレイス (J. K. Galfranth) である。彼は1931年世界大恐慌のさなかに大学を卒業して、カリフォルニア大学の大学院に学び、ハーバード大学の教授となった。その頃の彼はケイジアンであった。大戦中は政府機関の委員として戦時経済体制の推進に参画し、さらに故ケネディ大統領のブレインやインド大使なども勤めたまさに手八丁口八丁の学者である。はじめは独占企業体を悪と考えていたが、戦時中に独占企業体の実力を無視できないことを悟り、その独占力を制御すればよいという考え方に変ったようである。さらに彼は資本主義を広範な政府統制によって修正するものは、デフレや不況ではなく、インフレであり、社会的アンバランスであると考えた。これが彼の「ゆたかな社会」のテーマであった。だが現在のアメリカ社会は「ゆたかな社会」になったが、依然としてインフレと社会的アンバランス、それに投資のアンバランスと消費者信用の増大という経済的欠陥が見られる。そこで彼は「新しい産業国家」の著書でこれらの経済的欠陥を除去する方策を探ったのである。その結論として彼が打出したのは、テクノストラクチャーによる「成熟した法人企業」の計画化を推進することであった。テクノストラクチャーの役割は、デザイナー、プログラマー、科学技術者、経営者などのさまざまなグループが、合理的な意志決定をおこなうための autonomy であって、これまでの利潤極大化を目指す企業家的企業に代って「成熟した法人企業」へと変化する。そのためには国家の力を借りなければならない。このようにテクノストラクチャーの狙いと国家目標とが一致して「新しい産業国家」の成立が可能になるというのが、彼の結論であった。この結論には企業性善説が前提されていることを念のため付言しておこう。

つぎにレオンチェフ教授は産業進関分析のパイオニアとして無視できない貢献をしている。彼はソビエト生れではあるが、アメリカに渡り、近代経済学も身につけている。現在ハーバード大学の教授。彼の着想は、経済には企業とか個人とか無

数の経済主体が相互に財の売買が行われている。これを方程式に現わし、数字としてもらえることができる筈である。すでにケネーの「経済表」やワルラスの一般均衡論にその試みが見られる。この着想をハーバード大学のシュンペーターに相談したところ、果してその実現が可能であるかどうかを疑ったというエピソードが伝わっている。だがそれから10年近く経て、「アメリカ経済の構造, 1919年—1929年」が1941年に出版され、さらに第2版が「アメリカ経済の構造, 1919年—1939年」として出版された。これが産業連関分析の原典とされている。

この経済連関表の試みは、アメリカや西欧諸国、また後進諸国でも、経済計画の方法の不可欠の不可欠なものとして導入され、わが国でも昭和28年以来導入している。単に一国内だけではなく、国際間、地域間などさまざまな面でも応用されている。彼の投げかけた経済連関表の試みの寄与が如何に大きいかを知るべきであろう。

またマサチューセッツ工科大学の経済史教授のロストウ (W. W. Rostow) は、共産主義が平和的共存を基礎づけるような構造をもっていないのはなぜであろうかを問うて、ケンブリッジ大学で行った講義が、1960年に「経済成長の諸段階」(木村健康などの共訳)として公刊され、わが国で異常に関心を浴びた。彼はこの講義で、各国の経済発展には共通した5つの段階を経て成長している。それは1.「伝統的社会」の段階、2.「過渡的段階」、3.「飛躍」の段階、4.「成熟社会」の段階、5.そして成熟のゆきついたのが、現在の「大衆の大量消費の社会」であるというのである。

ところで現在大国といわれているソ連やアメリカが対立して、核兵器の新開発に多大の国費を投入している。本来自己防衛の武器である核兵器であるから、均衡しておれば使用するチャンスがない。それを敢えて承知のうえで、なぜ無駄な費用と技術などを投入しているのだろうか。誰が考えても無駄な支出であるのに、世界制覇を旨とするのだろうか。アメリカなどは資本主義体制をとり、ソ連などは社会主義体制をとって、それぞれの体制が最善と考えているが、全く愚の骨頂である。ロストウは資本主義体制の立場からソ連の社会主義体制を批判しているが、現在の段階は冷戦

が続くだけである。何とかならないものであろうかと思案しているだけが、彼の心境であろうか。

つぎに見逃してならないのは、シカゴ大学経済学部のシュルツ教授 (Theodore W. Schultz) の農業経済学者としての業績である。彼は1902年南ダコタ州アーリントでドイツ系移民の子として生れ、南ダコタ大学を経てウィスコンシン大学に進み、1930年に博士となり、同年アイオワ大学の教授に迎えられ、1943年シカゴ大学教授となった。その間彼の代表作「農業の経済組織」を1953年に出版している。そればかりではなく、彼は豊かな創造力と手堅い統計処理方法を生かして、農業経済の立場から政府機関に関係して対内、対外 (とくに後進国経済開発問題) に対して有力な発言を行なっている。

だが彼が農業経済学者として知られているのは「シュルツ理論」である。「シュルツ理論」は一言にしていえば近代経済学の立場から、「産業としての農業」の一般の特徴とその経済発展における地位と役割を明らかにしたものである。だからそれは一個の応用経済学として工業経済学や商業経済学と同列なのである。このことを豊富な計量分析を生かしてアメリカの農業で実証したのである。

つぎに無視できないのは、イエル大学のトリフィン教授 (R. Triffin) の業績である。彼は現在アメリカの市民であるが、もともと大陸ヨーロッパの小国ベルギーの出身であるから、彼の理論の展開にはアメリカ的立場を離れた発言があることに注目すべきであろう。彼の理論は現在の国際通貨制度すなわち金為替本位制はもはや世界経済を制度的に保障するものではなり、むしろそれを阻害するものになっているので、「国際協力方式」を提案している。その背後には国際通貨制度の改革の地域主義的アプローチ (とりわけ EEC のそれ) と彼が大陸の小国オランダ生れであったこと、それに彼がながらく国際決済銀行に関係し、国際通貨基金 (IMF) の専務理事としての経験があったことを見逃してはならない。

なおぜひ触れておかなければならないのは、ヌルクセの後進国経済発展の問題についての多くの発言と著書があることである。彼はウィーン大学で最後の学生生活を送っている点から見てもオースト

リア学派の伝統のなかに育っていることは明らかである。だが彼は戦時中にアメリカに渡り、ケインズ経済学から多大の影響を受けた。そのうえ1930年代に国際連盟経済局の調査員になったことから国際経済学者として成長した。不幸にして彼独自の理論の形成のなかばで逝去したので、その完成を見なかったのは残念である。彼は経済動学において、ほかの多くのオーソドックスな成長理論と異った彼独自の発展理論を展開している。それは後進諸国の経済発展を工業化を中心とした資本形成に求めたものである。国家によって、民間資本では不可能な資本構造の経済成長の基盤が整備されれば、あとは後進諸国民個々の努力、とくに企業的努力にまたねばならない。企業的努力は西欧の資本主義経済発展の中枢をなしているが、後進諸国において根本的には同じであるというのが、彼独自の理論であった。

さいごに見落してはならないのは、ハーバード大学教授だったシュンペーター (Joseph A. Schumpeter, 1883~1950) の業績についてである。彼は1883年、マルクスが異郷のロンドンで没した年に、オーストリアのモラビア地方の織物製造業者の一人子として生まれ、ウィーン大学で経済学を学び、ボン大学の教授となったが、1932年アメリカに渡り、ハーバード大学の教授となり、その後の半生を送った。だから彼は国際人であったが、むしろ彼は故国を失ない、難をアメリカに求めざるを得なかった亡命者であった。彼と同じ年にイギリスでケインズがケンブリッジで生れたことについては、さきに触れた。シュンペーターは幼くして父を失い、母の再婚先で育ったが、その間天才人としての自覚と孤独感を持つようになった。きわめて早熟な天才だった彼は、ほぼ30才前後までに自己の経済理論の根幹を築きあげた。「理論経済学の本質と主要内容」、1908. や「経済発展の理論」、1912. や「学説史と方法史の諸段階」、1914. などをつぎつぎと著わし、しかも壮年時代のそれらの所説を一生堅持していた。また彼は理論と政策とを分離して、政策面にはノータッチでひたすら理論経済学者としての生涯を終えている。彼は理論と学説史の二足の草鞋を巧みにこなした類い稀れな天才であった。

以上のアメリカの経済学者に見られることは、

彼らの殆んどがハーバード大学やマサチューセッツ・工科大学やシカゴ大学の関係者が多いこと、それに大半が異国からの移住者であることのほかに、共通して見られることはアメリカの資本主義体制に立っていることである。この点はさきのイギリスの経済学者たちが、イギリスの資本主義体制に立っているのと同じである。

因にこれらのイギリスとアメリカの経済学者たちの業績については成蹊大学木村健康教授監修の「現代経済理論のエッセンス」(ペリカン社刊1971年増補改訂第1刷)に収録されている。なお同書にはスウェーデンのミュルダール(K. G. Myrdal)とオランダのティンバーゲン(J. Tinbergen)も収録されている。

ミュルダールは1897年、スウェーデンのダリカリ州グスタフに生れ、1923年にストックホルム大学の大学院を卒業後しばらく法律事務に従事していたが、1927年同大学の講師、1930年にはジュネーブの国際問題研究所に関係したが、1931年母校の経済学教授として1938年まで在任した。それらの経済学書に一貫して流れているのは、経済学は実践に役立つべきであるという彼の信念は彼の黒人問題や後進国問題にも生かされている。そして世界最初の「福祉国家」の建設がスウェーデンに建設したのも、彼の努力によるところが多い。彼の民主主義に支えられた計画化を実現する方法の主張が実現されたわけであるが、さらに「福祉世界」の実現を目指す際にも同じ方法を採用すべきであると彼は主張している。

なお彼の夫人も幅の広い経済学者として著名であり、数年前にノーベル賞を授与されたが、恐らくこのノーベル賞はミュルダール夫妻の名において授与されるべき筈であったのであろう。

ティンバーゲンは1903年オランダのハーグに生れ、ライデン大学で物理学を専攻したが、社会民主主義運動家としても著名である。彼は信仰にもとづいて兵役を忌避したために、刑務所に収監される代りに、中央統計局に監視づきで勤務することになり、そこで計量経済学を勉強した。戦後彼はオランダ経済計画長官となり、オランダを商業国より工業国として復興させた「オランダ方式経済計画」は有名である。その後彼はオランダ経済大学付属経済研究所の理事と同大学計量経済学教

授をも兼任している。彼の「オランダ方式経済計画」は国内のみならず、多くの低開発国にも採用されている。また彼は画家としても、ピアニストとしても著名であり、また各国の語力にも通じている。彼こそまさにスーパーマン的な資質に恵まれ類い稀な人といえよう。

ただここで付言すべきことは、世界的指導的役割を演じているアメリカ経済学に代って、スウェーデン、オランダの北欧の二人の経済学者によって世界のあるべき理念の灯火が高く揚げられているということである。それは現在の東西の対立する陣営への警告であろう。

ところで以上の経済学者は木村健康教授の監修のもとで選び出されたものである。木村教授は戦前東大の河合栄次郎教授の愛弟子であったが、恩師の筆禍事件によって退職されたのと行をともにして東大を退職し、現在成蹊大学教授である。同教授の博学は衆知のことであるが、同教授の監修に選び出された各学者並びにその筆者もまことに適切である。私自身もこれらの筆者のなかには知人がかなりいる。また学者たちの多くは著書や邦訳書を通じてすでに承知していた。これは戦前のことで私が関学高商部の教師をしていた時に、数人の学生たちとともに西宮市甲風園の自宅でシュンペーターの「経済発展の理論」(邦訳)を輪読したことがあるが、折しもベルリンのオリンピックが開催されていたので、「前畑ガンバレ」の声をラジオで学生たちと耳にした思い出がある。そのほかかなりの学者の業績も熟知していたが、この度改めてそれらの学者たちの業績を、名解説者の手びきによって、原書や邦訳を通して勉強する機会が与えられた。ここに改めて監修者の木村教授や執筆者の方々にお礼申し上げたい。

ところでさきに触れたイギリスやアメリカの経済学者たちは、いずれも資本主義体制を是認している。ところが資本主義体制を否定して、社会主義体制を最善としているソ連はじめその同調国の経済学者たちはマルクス主義経済学を建前としている。もちろん同調国によっても、それぞれの「存在」(国内事情)を異にしているの、マルクス主義経済学の内容や政策にも多彩である。また同じ国内においても、「存在」の受けとめ方が必ずしも同じではないので、マルクス経済学といっても

多彩である。必ずしも一枚岩ではない。

この二つの陣営を背景にして対立した近代経済学とマルクス経済学が出現しているのが現状である。そして自分たちの陣営こそよりベターであると信じている。そのために使用できそうもない張子の虎のような核兵器などに莫大な費用を注ぎ込んでいる。核兵器を使用して全面戦争になれば、それこそ地球上の全人類が破滅することを知っている。両陣営とも口を開けば、世界平和と人類の幸福を唱えているが、それは法衣の下に鎧をちらせかしているのと同じように、本音は別なところにある。話せばわかる筈なのに、なぜ本音を話し合えないのか。たとえ同じテーブルに着くとしても、建前とかけ引きだけに終わっている。そこには両陣営の間に相互不信があるからである。

第二次大戦後世界平和を願って国連が設立されたが、いざというときには両陣営の本音が出てなかなかまとまらない。またさきに触れたスウェーデンのミュルダールやオランダのティンバーゲンの発言にも耳を傾けようとしな。まことに遺憾至極である。

五

ところで経済学史の研究のひとつの課題は、国民経済の内部における経済学の展開の跡を、その「存在」の変化に対応して辿ることである。そのことを念頭において、スミス経済学を手がかりとしてそのことを見てきた。だからこのひとつの経済学史研究はあくまでスミスのイギリスの背景との関連であった。現在の段階は国際化が進んではいるとはいえ、国際化には限度があって、それぞれの「国民経済」が依然として経済学の「存在」である。大戦中に脱稿した私の「スミス経済学の系譜」を早稲田大学に学位論文として提出した際に、そのなかで国益や国防が何よりも大切であると説く箇所があるのを主査の久保田明美先生が注目されて、あの箇所は大戦中の空気に左右されたのではないかといわれたが、私はもともとスミス経済学はイギリスの「存在」を背景にして書かれたものであるから、当然イギリスの「国民経済」の立場から書かれたものである。あの書物は戦後間もなく学位論文として提出したのだから補足訂

正の時間はあったのに敢えてその点を訂正しなかったのは、スミス経済学はあくまで「イギリスの存在」の反映であると考えていたからである。

とはいっても他面において各国の国民経済の在り方がスミス時代とは各段と変化している。スミス時代にはイギリスの国民経済は極めて有利な条件に恵まれていたので、自国の国益を守るために自由貿易を主張すればよかったが、技術にしても、エネルギーにしても国際化が進み、情報にしても直ちに各国に流れている。ヨーロッパや北米の先進国やほかの国ぐにとの間に経済交流と協調なくては、「イギリスの存立」そのもの、さらに先進諸国の存立も不可能になってきている。それに体制の異なるソ連や中国のことも無視することはできない。さらに後進国といわれる南の国ぐにのことも念頭におかねばならなくなってきている。現在の段階では資本そのものが国際化して、これまで自国のみの資本で自国内で企業の経営をすればよかったのが、他国に投資して、他国で企業が営まれ、生産するように、国境を越えている。だから各国はそれぞれの「存在」の立場から、自国の存立のために、新しい経済学を絶えず構想し直している。これが現段階における各国の経済学の姿であろう。

かつてドイツの経済学者リストが「政治経済学の国民的体系」(1841)で、ドイツの国民経済はイギリスの国民経済の在り方と異にしているから、イギリスのように進んだ経済を背景にした自由貿易と同調するわけにはいかない、ドイツの国民経済はイギリスと比べておくれているので、当分は保護貿易を採用するが、そのうちいずれはイギリス経済と肩を並べるようになるから、その際はイギリスと同じように自由貿易を採用すると主張したのも、当時のドイツ国民経済を反映したものであろう。現在の各国の国民経済の在り方もそれぞれの国ぐにの「存在」を反映しており、経済学の在り方にしても、それぞれの国ぐにによって多種多様である。だからそれらの国ぐにの経済学の発展の跡をたどり、比較検討することも、経済学説史研究のひとつの重要な課題であろう。もちろんこの課題の遂行を有限な個人の研究者の能力のみに期待することは無理である。国連あたりで、各国の一流学者の協力を得るしか仕方がないであ

ろう。そしてその成果を学史研究に生かすしか仕方なからう。

ただその際心すべきは、各国の経済学にはそれなりの長所もあれば短所もある、自分の国の経済学のみが他国よりも優れているという独善的な態度や大戦中のヒットラーのようにドイツを万国に冠たるものとして各国に臨んだ態度、さてはこの態度が「痘痕も笑窪と見る」態度や「坊主憎ければ袈裟まで憎い」という態度に見られるように、極端な偏見に左右される感情的態度にまで発展すると、客観的事実としては誰が見ても黒であるのに、それを敢えて白として見ることにもなる。各国の「存在」や経済学説にしても、それらに接する際にはスミスのいう公平無私な態度“impartial spectator”の態度を堅持すべきであろう。

六

最後にぜひ触れておかねばならないことがある。それは「何のため」に学説史の研究が必要であるかということである。

ここで想起されることは、いまから約70年ほど以前に、当時私がまだ敦賀商業学校の生徒であった頃に、「温故知新」という言葉に始めて接したことである。この四つの文字が小さな額に横書に収められて、本造の講堂兼雨天体操場の片隅に掲げられていた。当時は何の気なしにその四つの文字を見過していたが、学説史を研究しはじめてから、この四つの文字の精神を研究に生かせるのではないかと気づいたのである。「旧きを尋ねて新しきを知る」ということは、何も学説研究のみに限られたことではないが、学説研究にはとくに関連があるように考えられるからである。ここで旧きを尋ねるということは、何も過去の学説のみに限らずに、現代での学説の研究にも通ずることであって、それぞれの国ぐにの学説研究を、私の場合はとくにそれぞれの国ぐにのそれぞれの「存在」の変化と結びつけて考察することを旨としているので、このような研究方法で「温故知新」の精神を生かせばよいことにならう。

ところで本筋とは離れるが、わが国においても過去の経験を生かした例が数多くある。たとえば、ある地方の河川が過去の例から見て10年ごとに大

洪水があるとしよう。とすれば、その地方の人びとは自己防衛のために予め何らかの手を打つであろう。同じことが凶作も何年ごとに起こることが過去の経験から教えられているので、そのために予め何らかの手を打つであろう。だから大洪水の被害を最小限にとどめるために、予め河川の流れを変えたり、堤防を補強したりするであろうし、また凶作の被害を最小限にとどめるために、予め備蓄して万一に備えたりするであろう。これらはそこに住んでいる人びとの知恵であろう。これを伝え聞いたほかの地方の人びとも、現地に行つて何らの教訓を得て、それを生かすであろう。これは過去の例である。現在では各自治体において、それらの情報を生かして、新しい問題に対処している。

さて、本筋に帰らう。まず先進国相互間の経済学説の比較研究である。一口に先進国といっても、それぞれの「存在」の相違によって異なる経済問題が発生しており、その解決のために経済政策を行い、またそれを理論づけている経済理論がある。その際経済問題、たとえば不景気の問題や失業問題がある特定の先進国に生じ、ほかの先進国に起こらなかったか。なぜであろうかを「存在」と伝統にかかわらして明らかにすること、そしてそのために如何なる経済政策がとられたか、またその経済理論は如何なるものであったか、さらにこのような経済問題に直面しなかった国ぐにははそれなりの「存在」があった筈である。だから同じ先進国といっても「存在」と伝統が異っているから、異った経済問題が発生するのである。だから先進国相互間で情報を交換したり、相互に学び合うことが必要であろう。戦後先進国の脳が開催しているサミットもその一例である。

ところで後進国が先進国をモデルとして学びとった例として維新後のわが国のそれを見てみよう。維新後のわが国は後進国として何かにつけてヨーロッパの先進国をモデルとして、追いつけ追い越せを国是として、エリートたちのこれらの国ぐにへの留学、外国人の招聘、使節団派遣などによって、先進諸国の文物や生き方などについて学びとることにつとめた。さらに戦後はとくにアメリカをモデルとしている。18世期にイギリスがいち早く「世界の工場」として資本主義制を確立し

たのが、なぜ戦後アメリカにその席をゆずったのか、そこには現在の日本にとって学ぶべき多くの教訓がある。とくにかつての後進国であった朝鮮や台湾などが低賃金を背景として、繊維工業、造船業などでわが国のそれらを追いこそうとしていたことを、イギリスの「存在」とかかわして学びとるべきであろう。前者の撒を踏まない教訓である。

さらにもうひとつ忘れてはならないことは、これらの国ぐにの学者たちの研究態度である。たとえば、現在原始社会の研究としていまなお古典として残っているイギリスの I. G. Frazer の “The Golden Bough” やアメリカの R. F. Benedict の “菊と劔” の業績が、当時のスポンサーたちの意図とは別に、あくまで事実即して客観的にとらえようとしたクールな態度であった。アメリカは戦前すでに敗戦国のわが国の占領政策を計画していた。だからこそベネディクトの研究もまたそのために有効に生かされている。急がば回れといわれているように、スポンサーの意図を単略的に研究に結びつけて生かそうとすることは避くべきであろう。ここにもまたアダム・スミスの「公平な傍観者」の眼が必要であることを忘れてはならないであろう。

なお、ここで若干追記したいことがある。

その一。私は学説研究に社会学的方法の導入を模索していた時期に、「経済学説史の方法論序説(一)―問題史への途―」という試論を書いている。この試論は、関西学院高等商業学部機関誌「商学評論」第11号第1号(1932)に掲載されたものである。

この試論の狙いは、社会は絶えず変化するものであるから、それぞれの社会にはその変化に対応して解決しなければならない基本的な共通な問題に直面している。その問題を解決するために、政策、それを裏づけている学説がある。このような見地から学説史を辿ることが可能であろう。だか

ら学説史研究において社会学的方法の導入が可能でないかと考えたのであった。

もちろんマルクスの余剰価値論研究史のように、ある特定の問題史を辿ることも可能であろうが、ここでの問題史の辿り方はこのような特定の問題、たとえば価値論、賃銀論、人口論などの史的発展の跡を辿るのとは異っている。さきの「商学評論」の拙稿のサブタイトルに「問題史への途」と題したのもこのためであった。いまから思えば全くお恥しい幼稚な試論であるが、私の若い日の模索時代のあがきの一面がうかがえる。

その二。社会学的方法の導入は何も経済学説研究に限定されるものではない。たとえば、社会学についてもこのことがいえる。新明正道先生の1978年の日本社会学史学会大会での会長講演にそのことがうかがえる。この講演はあとで東北大学「社会学研究」第37号に『「社会学の社会学」の社会学』と題して収録されている。因に先生のご逝去はその後間もなくであった。

先生はこの講演において、1960年代のはじめごろから70年代にかけて、アメリカ社会学界において社会学そのものの在り方を社会学の立場から再検討している動きを念頭におかれているが、ご存知のように先生は戦前すでに「知識社会学の諸相」(昭和7年、宝文館刊)という名著を出されているところから、この講演は先生にとっては当然すぎるほど当然であったといえよう。

その三。学説研究に必要なことは、学説の本質的なものの把握である。読書百回意はずから通ずる底の根気よく学説を研究することが必要である。その際微細な点にも注意を払うことが必要であるが、さりとてあまりに微細な点のみにこだわると、本質的なものにかかわりのない重箱の隅をつつつくようなことにもなる。その結果「ミイラ採りがミイラになる」恐れが多分にある。ミイラにならないように警戒すべきであろう。

(昭和61年11月2日、宝塚・紅葉が丘にて)